

社会学における社会統制と 人間性の概念 II

折橋 徹彦

問題の整理

社会統制の心理的メカニズムに関する理論の問題⁽¹⁾がこの研究の主題である。われわれはロングのパーソンズ批判⁽²⁾から出発した。パーソンズの社会統制の理論の基礎にある人間性の概念は、「社会化」の概念と「役割」の概念である。ロングはパーソンズがこれらの概念を一面的にししか理解していないという。すなわち、人間性の社会的側面のみが強調されすぎること、ロングは指摘している。これは人間性の社会的性質のみが検討され、自然的性質が見逃されているということでもある。ロングは社会化の概念との関連で、超自我の問題に対して他我の問題が忘れられているという。この社会化の問題は、現代社会学及び社会心理学のパーソンナリティ理論⁽³⁾のなかで論じられなければならない。

次にロングが指摘するのは、パーソンズの使っている役割の概念が状況的な人間の行動しかとらえることができないという

ことである。われわれは、ロングの批判の対象となっている役割理論はインタラクショナリストの源流であるG・H・ミードの役割理論と比較すると、かなり固定的かつ静的な理論であると考へる。

ロングがパーソンズの社会統制理論及び人間性の概念を批判した理由の一つに、パーソンズの理論では、社会変動、社会的葛藤及び逸脱行動という問題がその理論的枠組のなかに積極的に組込まれないということがある。そして、その原因がパーソンズの人間性の概念が社会化されすぎていることによるからであると考えられる。すなわち、これは人間性の社会的性質のみが強調されることによる、というのがロングの考へである。

しかし、われわれは、ロングの批判するパーソンズの社会化及び役割の概念は本来これらの概念の意味していることの一面しか表現していない、と考へる。故に、われわれは、これら人間性の概念の本来の意味にさかのぼれば、それがロングなどによって、人間性の社会的性質という側面に関する概念にしすぎないと規定されても、より広く、社会変動、社会的葛藤、逸脱行動など理解するための人間性の概念であることを明らかにすることができる、と考へる。

その作業として、まず、G・H・ミードの役割理論を考察することにした。インタラクショナリストの役割理論は、そのパーソンナリティ形成理論のなかにみられる。ミードにおいては、これは自己の形成過程に関する理論として展開されている。ミードは自己の形成がおこなわれる社会過程を、コミュニケーション

「自己形成過程」として、とらえているということが明らかにされた。われわれは、さらに、自己の対象化の過程、そしてこの自己が形成される社会的背景の問題を検討していく。

対象としての自己の成立

これまでも検討してきたように、ミードは自己の形成がコミュニケーション過程のなかに求められるという。ミードの考えによれば、コミュニケーション過程のなかでも、殊に、意味あるシンボル、すなわち言語過程が自己の成立に不可欠である。彼にとって、自己は単なる生理学的な生物体を意味するものではない。だから、人間は生物体として生まれついたり、ただちに自己を持っているということはないわけである。

自己は諸個人の「社会的経験及び社会的活動」を通じてのみ発達するものである。自己はまた、それ自身の対象となりうるという特徴をそなえている。すなわち、自己は主体とも客体ともなりうる。この問題は、かつての心理学では「意識が意識の対象となりうる」というように理解されたこともあった、とミードはいう。しかしミードの立場である行動主義的立場では、自己が対象となるためには、身体をもった生物体が、自己の対象となることが出来るような経験を経なければならぬ。

この問題は、さらにミードの展開する次のような問題に関連してくる。自己が自己を意識するということはどういふことなのか、ミードの言葉では、「個人はどのようなにして、自分の外に、『自分の対象』となるような形で出ることが出来るか。」と

いうことになる。われわれが、ある行為に熱中しているとき、その行為をしている自分を意識することはなくとも、その行為とは関係のない過去の自分の姿をふと想い浮べることがある。これが自己の二重性の一つのあらわれである。

自分が自分の外に出るには、理性という道具が使われると、ミードは考へる。この理性の道具が作用するためには一定の社会状況において、個人が自分の行為の対象となる人々と同じ経験の領域に入らなければならない。

この理性の道具によって、自分自身の存在を意識する仕方は二つある。第一には、個人が自分の属している社会集団のなかの他の集団の成員たちのそれぞれの特定の立場から見た自分を意識するやり方。第二には、社会集団のより一般化された立場から自分を意識する仕方がある。このどちらの場合も、個人は自分というものを直接意識するのではなく、社会集団の立場を媒介として間接的に自己についての意識を経験する。

ミードはこの自己意識の成立の過程を態度の関係で次のように整理している。「個人は自分自身を社会環境、経験の文脈、あるいは彼自身と他者をふくむ諸行動のなかで、他者に対する彼の態度をとりいれることによって一つの対象となる。」このように、個人は自分自身の対象となるかたちで経験的に自己の外に出ることが出来るわけである。

このような自己の対象化が、意味のあるシンボルという意味でのコミュニケーションのなかで成立するということは先にも述べた通りである。

この自己の成立に社会的経験が基礎になっていることは、ミードの「それ自身の対象となりうる自己は本質的に一つの社会構造である。」という言葉にもしめされている。しかし自己はそれがいったん成立すると、自己に対する社会的経験の場を提供することになる。これは、自己が成立すると、自己の間の会話が可能となり、社会からは完全に孤立したかたちでも、自己内で一種の社会活動をおこなうことができることを意味している。だから、人間は、いったん自己が成立してしまえば生涯、社会から完全に隔絶されたままで生活することも可能なのである。自分を自分の友人とすることというのをいうが、そのことは理論的にも可能なわけである。

これに似た行動は、われわれの日常生活のなかでみられる。自分の他の人との会話に、もう一人の自分がくわわるといふことがある。話をしている相手が自分の自己に対して反応してくるのと同じ仕方、自分が自分の自己に反応することがある。また、自分が発言していることをきいて、次にいいだすことは、何にしようかときめている自分が存在している。われわれは、人と話をしているとき、自分の今いっていることを次々と理解して、次にいふべきことをきめている。ここでも自己が複数、同時に存在していることが明らかにされる。

この過程をもう一度コミュニケーションとの関係のなかで整理していこう。ジュエスチニアの会話では、われわれがいうことが、相手の人のうちにある反応をひきおこす。そして、われわれはその反応によって自分の行為を変化させる。このジュエス

チニアによる会話がコミュニケーションのはじまりなのである。そして、個人はこのジュエスチニアによるコミュニケーションを自分自身の内部でおこなうようになる。

この会話が一つの意味あるものになる、すなわち、言語化するとき、それは個人自身にも影響を与えるような行為になる。

この過程は、社会的側面を切りはなした、個人自身のなかでも成立する。すなわち、自分自身との会話ということがあるわけである。反射的知能(reflective intelligence)のなかでは、人々は行為することについて考え、この行為が社会過程の一部分として残るように行為する。ここで「思考」は社会的行為の準備的なものである。

結論的にいえば、自己は、自分に対して反応することによって成立する。しかし、この反応は言語活動と無関係ではない。ミードはこのことを次のように要約している。

「個人は言語行動の形態以外に自分に対して対象とはならない。個人は自分に対する対象となる以外に反省的な意味での自己とはならない。コミュニケーションは個人が自分自身に反応するタイプの行動である。このことがコミュニケーション行動に重要な意味をもたらしている。」

自己成立のための社会的背景

1 言語によるコミュニケーション

コミュニケーションが自己の成立のための重要な条件になることはこれまでも述べてきた。ここでは、次に述べる遊び、

ゲームという社会的条件と対比しながらこの問題をとりあげることにする。コミュニケーションにも二つの段階がある。

その第一は、動物間の協同的活動にみられるジュスチュアアの会話である。この場合は、一つの生物体の行為のはじまりは相手の生物体の反応をひきおこす刺激となる。そして、次に、この反応が、第一の生物体の反応、すなわち行為を適應させるための刺激となる。この過程が初歩的なコミュニケーション過程である。

第二のジュスチュアアによる会話では意味が介在している。ここでは個人は自分のいったことの意味をとらえている。この段階においては、第一の行為者のジュスチュアアは、相手の人に対してだけではなく、自分自身に対しても反応をひきおこす。人間の社会環境が固有の性格をもつのは、この「意味」の存在と関係がある。ジュスチュアアの意味となるのは、第一の生物体のジュスチュアアに対する第二の生物体の反応がひきおこされることによる。この反応がジュスチュアアに意味を与える。ミードはこのコミュニケーション過程を「コミュニケーション」とは、本質的に、シンボルが他の個人のなかにひきおこすことを自分の自己のなかにひきおこすことができる。⁽¹⁰⁾ものであるとする。

ミードはヘレン・ケラーの精神形成を例にとり、「ヘレン・ケラーは、他者に反応をひきおこす、その同じ反応を自分のうちにもひきおこすことができるシンボルによって、他の人とコミュニケーションをもつことができた。そして、そのときはじ

めて、彼女は精神的な内容とよばれるもの、すなわち自己をもつことが出来たのである。⁽¹¹⁾」

言語コミュニケーションが介在することによって自己が形成される過程に関するミードの考えは以上要約した通りである。次にわれわれは、言語以外のものの介在による自己の形成の過程を検討してみることにする。

2 「遊び」及び「ゲーム」

こどもの「遊び」は一般的に二つの段階を考へることが出来る。第一の段階は、こどもが、母親、先生、警官などになって遊ぶ段階である。ここでは、単に、いろいろな役割をこどもはとって、その役割を演じながら遊ぶにすぎない。次の段階では、ミードの例にあげているような「インディアンごっこ」などという遊びが出てくる。こどもは、ここでは、他者に呼びおこす反応を自分のなかにひきおこす刺激をもつ。この段階の遊びでは、こどもは、これらの刺激に対する自分自身の反応を自己の形成に利用する。たとえば、こどもは自分に手紙を出して、自分で受けとったり、先生になったり親になったりして自分にしゃべりわけたりする。このように、こどもは他者にひきおこすと同じ反応を自分のなかにひきおこす一組の刺激をもっている。

「ゲーム」の段階にいたると、その過程はより確実な組織を認められている。ゲームをしているこどもたちは、ゲームにくわわっているあらゆる他者の態度をとらなければならない。そして、これらの異なった役割はたがいな一定の関係を維持してい

なければならぬ。ミードはゲームでの個人の役割の演じかたについて次のように述べている。「多くの人々がそのなかに含まれるようなゲームでは、一つの役割を演ずることも、他の人々すべての役割も演じなければならない。」このようにしてゲームのなかの反応は組織化される。

ゲームと遊びの基本的な相違は、ゲームにおいては、そのゲームに参加していることもはあらゆる他者の態度をとらなければならぬということにある。ゲームでは競技者の態度が一つの単位に組織される。そして個人の反応を統制するのはこの組織である。

野球をしている人達の例を考えてみる。一人のプレイヤーのあらゆる行為は、ゲームをプレーしている他のプレイヤーの行為についての彼の想定によって決定される。だから、このプレイヤーはそのチームに参加している、それぞれの他のプレイヤーに自分になることによって統制される。

ミードはここで、一つの同じ社会過程に参加している人々の態度の組織されたものとしての「他者」を考えている。

この組織化された「他者」をミードは次のように説明している。

「個人に対して、彼の自己に統一性をあたえる組織されたコミュニティあるいは社会集団を「一般的他者」と呼ぶことができる。」この一般的他者の態度はコミュニティ全体の態度である。

個人が完全に自己を発達させるためには、彼に対する他の人

人の態度をとる。人間の社会過程のなかで、個人が相手の他者とたがいに態度をとりあう。そして、このようにして全体としての社会過程を個人の経験にかかわらせる。といったようなことだけでは充分ではない。

個人が完全に自己を発達させるためには、さらに次の条件が考えられる。まず、個人に対する他の諸個人の態度をとり、そしてたがいに態度をとりあうのと同じやり方で、かれらがともにかかわりをもっている、共通の社会的活動及び社会的におこなわれていること、いろいろな局面に対して、社会集団の成員として態度をとること。そして、その組織化された社会集団のこれらの諸個人の態度を全体として一般化することによって、個人はそれぞれの異なった社会的企てに対して行為するということである。この条件が満たされることによって、個人の自己は完全に発達する。

社会は一般的他者という形で、社会過程のなかにふくまれてくる諸個人の行動に影響をおよぼす。社会過程ないし、コミュニティが個人の思考に、決定要因として介入してくるのもこの一般的他者という形態においてである。われわれは一般的他者の態度をとることによって思考することができるわけである。思考はジュスチュアアの内面化されたものであり、一般的他者とのジュスチュアアの会話がおこなわれることによって、より一般的思考が可能となる。

自己においても、この一般的他者の態度をとり入れることによって個人の自己はさらに発達していくことになる。

ゲームはこのような組織化された一般的他者を個人に提供する場である。ゲームのなかで、子どもは共通の目的のもとで、自分がこれからしようとしていることが、組織された他者の態度をとることによって影響されることをゆるしている。このようにして、子どもは全体としての社会の有機的成員になつていく。このゲームという論理的な状況のなかで子どもが経験することは、日常生活のなかでも経験される。この過程のなかで、子どもは自分の属しているコミュニケーションについての自己意識をもった成員になる。この自己意識は、単なるわれわれの意識ではない。それは、集団内の他者に属している一定の反応をわれわれ自身のうちにもよびおこすことができる能力をさしている。

ミードによれば、個人の自己が完全な形で形成されるのはこのゲームの段階を経てからのことになる。このミードの考えでは、個人はより社会的に社会過程へと統合されていくことによつて、より個人として高度な自己を形成できることになる。自己がきずかかれていた構造というものは、そのコミュニケーションの成員全体に共通な反応である。だから、自己として成立するということは、とりもなおさず、コミュニケーションの成員であるということである。これらのコミュニケーションの成員に共通な反応というものがそのコミュニケーションの成員に共通なものに對する、その成員の原則、そして、たがいに認めあつた態度というものを形成する。各成員は自分を一般化された他者の位置におくことになる。

このような態度の構造が、単なる習慣の束とは区別される自己をつくりあげるのである。われわれ自身、ミードのいうように、しゃべるとき特殊な語調というものをもっている。これは人々も気がついていない習慣的なものである。多くのこれらの習慣の束はわれわれの意識された自己には入ってこない。自己というものはこれに對して意識化された存在である。

以上がミードによつて展開されてきた自己の構成されるための社会的背景である。基本的には社会集団が、集団の成員としての個人の自己が成立するための母体となる。自己の形成される過程には、さらに、コミュニケーション過程、殊に言語コミュニケーションの過程そして、遊びゲームという、人間の社会的発達の際に通過する過程がある。より一般的な、そして社会的段階への自己の発達、ゲームとの関連で考えられる。

次の問題点

われわれは、ここでは問題をG・H・ミードの自己形成の理論に集中してきた。これまで検討してきた限りにおいては、ミードの自己の概念では、個人と社会との間に調和的な関係しか問題となつていないように考えられる。またミードの問題としていることは人間の理性的側面と社会の論理的側面との相互作用である。この相互作用が人間の側では自己そして社会の側では言語及び意味という形でとらえられている。この問題の展開の過程からみれば、ミードでは、ロングのいう人間社会的性質のみしか展開されておらず、人間の自然的性質の問題はやはり

忘れられているかのごとく考えられる。しかし、S・フロイトによる問題の接近の仕方とは異なった問題への接近の仕方をしていゝるミードにおいても、完全には社会化されない人間性の問題が論じられる。この問題はミードの「I」の概念を検討してゆくことによつて明らかになる。(未完)

- (1) 拙稿「大衆操縦の心理的基礎」『一橋論叢』五四巻一
号、十二月号。
- (2) Dennis H. Wrong, *The Oversocialized Conception of Man in Modern Society, in Personality and Social System* 1966, ed. by S. Smelser.
- (3) 拙稿「社会心理学におけるパーソナリティ理論」『一橋論叢』第五二巻二号、八月号。
- (4) Ralph H. Turner, *Role-Taking: Process Versus Conformity in Human Behavior and Social Processes* 1962, ed. by A. Rose. マーナ41の論文のなかに用い

てリントンの役割概念を批判している。パーソンズの役割概念はリントンのそれに近い。

- (5) 拙稿「社会学における社会統制と人間性の概念I」『一橋論叢』第六一巻一号、一月号。
- (6) G. H. Mead, *Mind Self and Society*, 1934 ed. by Charles W. Morris, p. 138 前。本稿では主として第二部「自己」の部分を選納的にまとめてこれを検討した。

- (7) *ibid.* 139.
- (8) *ibid.* 140.
- (9) *ibid.* 142.
- (10) *ibid.* 149.
- (11) *ibid.* 149.
- (12) *ibid.* 151.
- (13) *ibid.* 154.

(関東学院大学講師)